

# OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030

仮訳にあたって

OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトについて

OECD（経済協力開発機構）では、2015年からOECD Future of Education and Skills 2030プロジェクト（Education 2030プロジェクト）を進めてきました。このプロジェクトは、2015年から2018年のフェーズ1において、30を超える国から、政策立案者・研究者・校長・教師・生徒・財団・民間団体などが集まり、マルチステークホルダーとしての対話を重ね、「2030年に望まれる社会のビジョン」と、「そのビジョンを実現する主体として求められる生徒像とコンピテンシー（資質・能力）<sup>1</sup>」を共に創造・協働してきました。また、OECD諸国において、どのような生徒像やコンピテンシーがカリキュラムに盛り込まれているのかというカリキュラムの国際比較分析も実施してきました。2019年から2022年までのフェーズ2では、フェーズ1で検討されたコンピテンシーの育成やカリキュラムが、現場において効果的に実施されるための手段として、カリキュラム改定と連動して改定される教授法・評価法や教員養成・教員研修などについて、引き続き、国際的な議論を重ねています。

本プロジェクトは、2019年5月にフェーズ1の最終報告書の一つとしてコンセプトノートを発表しました。コンセプトノートは、国際マルチステークホルダーが共に創造してきた「2030年に望まれる社会のビジョン」と、「そのビジョンを実現する主体として求められる生徒像とコンピテンシー」の概念について説明したもので、2018年に公表されたポジション・ペーパー（中間報告）をさらに発展させたものともいえます。コンセプトノートの作成と、その基礎となった国際的な議論において、日本は2015年から文部科学省を始めとして、政府関係者・研究者・教師・高校生・大学生・企業関係者などの多くの参加者がプロジェクトに積極的に貢献し、発表・提案を行い、重要な役割を果たしてきました。その意味で、コンセプトノートはOECDのみならず日本からも多様なステークホルダーが参画して作り上げたといえます。

この度、これまで本プロジェクトに貢献をしてきた関係者・関係組織が主となり仮訳を作成しました。この資料は本プロジェクトが作成した”**OECD Future of Education and Skills 2030 Conceptual learning framework Concept note: OECD Learning Compass 2030**”の仮訳です。作成の際には「ポジション・ペーパー」の仮訳を基にしつつ、高校生、大学生や教師を含む、以下に記載されていない様々な方からもご意見をいただきました。厚く感謝申し上げます。なお、今後の議論や研究の進展等を踏まえて訳出が変更される可能性がありますので、ご了承ください。

担当者・担当組織（五十音順 2020年3月時点）

秋田 喜代美	東京大学 教育学研究科 教授
安彦 忠彦	神奈川大学 特別招聘教授、名古屋大学 名誉教授
太田 環	日本イノベーション教育ネットワーク（協力 OECD） 事務次長
岸 学	東京学芸大学 名誉教授
木村 優	福井大学教職大学院 准教授
小村 俊平	日本イノベーション教育ネットワーク（協力 OECD） 事務局長
坂本 篤史	福島大学 人間発達文化学類 准教授

<sup>1</sup> 本文の初出のみ「(資質・能力)」と追加し、それ以降は省略

下郡 啓夫 函館工業高等専門学校 一般系 教授  
下島 泰子 東京学芸大学 次世代教育研究推進機構 特命講師  
柄本 健太郎 東京学芸大学 次世代教育研究推進機構 講師  
時任 隼平 関西学院大学 高等教育推進センター 准教授  
奈須 正裕 上智大学人間科学部 教授  
長谷川 友香 東京学芸大学 次世代教育研究推進機構 特命講師  
花井 渉 独立行政法人 大学入試センター 研究開発部 助教  
松尾 直博 東京学芸大学 教育学部 教授  
三河内 彰子 東京大学 大学院教育学研究科 特任助教  
無藤 隆 白梅学園大学子ども学部 教授兼子ども学研究科長  
文部科学省 初等中等教育局 教育課程課

本文書の原文は、下記の URL をご参照ください。

[http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD\\_Learning\\_Compass\\_2030\\_concept\\_note.pdf](http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_Learning_Compass_2030_concept_note.pdf)

仮訳の留意点等は、本資料末尾の付記をご覧ください。

## 概要

### OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030

OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030（訳注：以下、ラーニング・コンパス）は OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトの成果であり、教育の未来に向けての望ましい未来像を描いた、進化し続ける学習の枠組みです。教育の幅広い目標を支えるとともに、私たちの望む未来(Future We Want)、つまり個人のウェルビーイングと集団のウェルビーイングに向けた方向性を示します。

ラーニング・コンパスという比喻は、生徒が教師の決まりきった指導や指示をそのまま受け入れるのではなく、未知なる環境の中を自力で歩みを進め、意味のある、また責任意識を伴う方法で、進むべき方向を見出す必要性を強調する目的で採用されました。

この枠組みは生徒が 2030 年以降も活躍するために必要なコンピテンシーの種類に関する幅広いビジョンを提供しています。この枠組みはまた、ローカルな文脈に合わせて調整できる余地を残しながら、グローバルに妥当で、情報交換のできる共通の言語と理解を育んでいくものです。

ラーニング・コンパスの構成要素には学びの中核的な基盤（訳注：エージェンシーと変革を起こすコンピテンシーを育む土台となる主な力）、知識、スキル、態度と価値、より良い未来の創造に向けた変革を起こすコンピテンシー、そして見通し（Anticipation）、行動（Action）、振り返り（Reflection）の AAR サイクル（これらの構成要素に関しては各要素の concept notes を参照）が含まれます。ラーニング・コンパスは、生徒が周囲の人々、事象、そして状況をより良いものにするを学ぶ上で、責任ある有意義な行動を取るための方向性を決めるために生徒が使うことができるツールであることから、生徒エージェンシー（concept note を参照）はラーニング・コンパスの中心的な概念です。

### キー・ポイント

- ・ ラーニング・コンパスは評価の枠組みでもカリキュラムの枠組みでもありません。大きな構造における学習の幅広い範囲と種類を明確にすることで学習そのものが持つ価値を認めています。そして、学習が学校の中だけで起きているわけではないことも示しています。
- ・ この学習の枠組みは、教育システムをより良いものへと変革することに貢献する意思をもった世界の政府代表者、研究者、学校のリーダー、教師、生徒、そしてソーシャル・パートナーの協働によって生み出された成果物です。
- ・ 社会的ウェルビーイングという概念は、年月の経過により、これまでの経済や物質的な豊かさよりも多くの意味を含むようになりました。私たちが望む未来には数多くのビジョンが存在するかもしれませんが、社会のウェルビーイングは共通の目的地です。

### OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030

歴史的に見て、教育は社会変革の波に乗り遅れることがほとんどでした。19世紀と20世紀における教育システムは突発的な拡大と再構築を時折行うことで変化してきました。しかしこれらの突発的な時期を外せば、カリキュラムは往々にして静的であり、直線的で固定的な構造を持っていました。また産業形態としての学校教育では、生徒が授業を受動的に受けることが期待されていました（[OECD Future of Education and Skills 2030 project background](#)を参照）。しかし我々の世界を変革し、数多くの分野で現状の制度を覆す深淵かつ広域な変化に直面する今日、教育の目標や活躍するために必要な生徒のコンピテンシーを再考する必要があるという認識が広がっています。地球規模のトレンドである、デジタル化、気候変動、人工知能の発展の3つの要因だけとて、これらは教育の目標や方法を根本的に見直す必要性を呼び起こしているといえます。

2015年、OECDの教育政策委員会は、客観的な立場から俯瞰し、教育が直面する長期的な課題を検討するとともにカリキュラムの設計や開発をより体系的かつ根拠に基づいたものにするため、OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトを立ち上げることに合意しました。このプロジェクトの目的は、世界の国々が次の2つの大きな問いへの答えを見つけられるようにすることです：

- 現代の生徒が成長して、世界を切り拓いていくためには、どのような知識や、スキル、態度及び価値が必要か。
- 学校や授業の仕組みが、これらの知識や、スキル、態度及び価値を効果的に育成していくことができるようにするためには、どのようにしたらよいか。

これらの問いに対するひとつの答えとして、OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトは2030年の教育に求められている未来像を描いた、進化し続ける学習の枠組みであるOECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030（図1を参照）を開発しました。このラーニング・コンパスは、個人や社会のウェルビーイング：私たちの望む未来（Future We Want）に向けた方向性を示しています。ラーニング・コンパスは、学習者個人、教育実践者、システム・リーダー、政策立案者、組織の意思決定者といった複数のレベルで利用できるように、共有する未来に含まれる中核的な目標や要素を言語化することによって、彼らの努力を明確にし、結びつけ、また方向づけることを目標としています。

ラーニング・コンパスは様々なステークホルダーが形成する幅広いコミュニティにより時間と共に改良される「進化し続ける枠組み」です。この学習の枠組みは、教育システムをより良いものへと変革することに貢献する意思をもった政府代表者、研究者、学校のリーダー、教師、生徒、そしてソーシャル・パートナーの協働によって生み出された成果物です。これらのステークホルダーの出身国は多様です。そのため、この枠組みはまた、ローカルな文脈に合わせて調整できる余地を残しながら、グローバルに妥当で、かつ情報交換のできる共通の言語と理解を育んでいくものです。

#### ラーニング・コンパスは評価の枠組みでもカリキュラムの枠組みでもない

ラーニング・コンパスが提示するのは「評価の枠組み」ではなく、「学習の枠組み」です。この枠組みでは、どのようなコンピテンシーが評価されるべきか、あるいは評価できるのかではなく、生徒が2030年に活躍するために必要なコンピテンシーの種類に関する幅広いビジョンを提示しています。「測定されるものは大切にされる」と一般的に言われますが、この学習の枠組みは（少なくとも現段階では）測定できないものに価値を認められるようにします。つまりラーニング・コンパスは、大きな構造のもとで幅広い範囲と種類の学習があることを明確にし、学習そのものに価値があることを認めます。それと同時に、評価を主導するものとして学習の枠組みを使うこともできます。例えば生徒の進捗状況を確認しながら支援するために、どのような文脈においてどのような学習を優先させるべきかを話し合うことができます。

ラーニング・コンパスは「カリキュラムの枠組み」でもありません。公式のカリキュラムや指導方法に定められた教育とともに、フォーマルな学習（目的・時間・手立てが特定され、組織化・構造化された環境における学習）、ノンフォーマルな学習（計画された活動に埋め込まれた意図的な学習。目的・時間・学習支援に関して明示的に指定されていない）、インフォーマルな学習（仕事、家庭や余暇などの日常の活動に付随して起きる、目的・時間・学習支援が組織化・構造化されていない学習）も重要であることを認識しているからです<sup>2</sup>。2030年に向けて、生徒が学校、家庭、そして所属しているコミュニティなど複数の層や複数の方向性で学習に参画できるようになることを理解することがますます重要になってきます。

ラーニング・コンパスの「方位」は私たちが希望する未来へ生徒が進むための支えとなる



図 1. OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030

### 生徒エージェンシー<sup>3</sup>／共同エージェンシー

ラーニング・コンパスという比喻は、生徒が教師の決まりきった指導や指示をそのまま受け入れるのではなく、未知なる環境の中を自力で歩みを進め、意味のある、また責任意識を伴う方法で、進むべき方向を見出す必要性を強調する目的で採用されました。このため、**生徒エージェンシー**の概念はラーニング・コンパスと密接に関わっています（[concept note on Student Agency](#)）

<sup>2</sup> 定義は次を参考に訳注として追加。OECD (2010) *Recognising Non-Formal and Informal Learning: Outcomes, Policies and Practices*. pp.22-23

<sup>3</sup> OECD (2018) のポジション・ペーパーによると「エージェンシーは、社会参画を通じて人々や物事、環境が より良いものとなるように影響を与えるという責任感を持っていることを含意する」とあります。これは新学習指導要領で示されている主体性に近い概念ですが、より広い概念と考えられます。

を参照)。ラーニング・コンパスを手にしてしている生徒を描いた上記の絵は、生徒が目的意識を働かせ、自分自身の責任を果たしながら、周囲の人々、事象、状況をより良くするために学んでいく姿を表象するものです。

ただし、生徒エージェンシーは生徒による自治や生徒による選択を意味するものではありません。人は社会的な文脈の中でエージェンシーを学び、育み、そして発揮するのです。そのため、上記の絵は生徒が仲間や教師、家族、そしてコミュニティに囲まれ、それらの人たちがウェルビーイングに向けて生徒と相互作用して生徒を導いていく様子を描いています。これが**共同エージェンシー**の概念です。

### 学びの中核的な基盤

これまでの研究から、あらゆる学習者がエージェンシーを発揮し、自らが持つ可能性を発揮できる方向へ進むために、生徒は学びの中核的な基盤を持っていなければならないことが判明しています。学びの中核的な基盤は、「カリキュラム全体を通して学習するために必要となる基礎的な条件や主要な知識、スキル、態度及び価値」(concept notes on [Skills, Knowledge, and Attitudes and Values](#) を参照) を指します ([concept notes on Core Foundations](#) を参照)。2030年に必要とされる主要な知識、スキル、態度及び価値は読み書き能力やニューメラシー(数学活用能力・数学的リテラシー)に限らず、データ・リテラシー(データ活用・解析能力)やデジタル・リテラシー(デジタル機器・機能活用能力)、心身の健康管理、それから社会情動的スキルも含まれます。これらは21世紀で活躍するために欠かせない基礎能力であり、人間の知性を支える重要な側面であるとますます認識されています。

コンピテンシーはこれら学びの中核的な基盤をもとに育成することができます。コンピテンシーは知識、スキル、態度及び価値を含む包括的な概念です。OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトではコンピテンシーを単なる「スキル」ではない、それ以上のものとして捉えています。スキルはコンピテンシーを発揮するための前提条件です。2030年に向けた準備を整え、活躍できる能力を備えるためには、生徒は未来をより良い方向へ変えるために自らの知識、スキル、態度及び価値を、責任を持って、また首尾一貫した方法で使える必要があります。

コンピテンシーと知識は競合する概念でも、相互に排他的な概念でもありません。生徒はあらゆる物事を理解するための基本的な要素として、核となる知識を学ぶ必要があります。生徒は知識にもとづいていくつものコンピテンシーを発揮することもでき、知識を更新あるいは適用するために育ち続けるコンピテンシーを用い、そして理解を深めていくのです。したがって、コンピテンシーとは単に知識やスキルの習得にとどまらず、不確実な状況における複雑な要求に対応するための知識、スキル、態度及び価値の活用を含む概念なのです。

### より良い未来の創造に向けた変革を起こすコンピテンシー

学習者には世界における自己という感覚を養うことが求められます。複雑性や不確実性に適応し、より良い未来を創造できるようにするため、学習者は各自、**より良い未来の創造に向けた変革を起こすコンピテンシー** ([concept note on Transformative Competencies](#) を参照) を備えていなければなりません。これらのコンピテンシーが変革の力を持つ理由は、生徒が自らの視野を養い、振り返れるようにするものであるとともに、変容する世界をどのように創造し、そこでどのような貢献ができるかを学ぶ上で必要なものであるからです。新たな価値を創造する力、責任ある行動をとる力、対立やジレンマに対処する力は未来を形作り、そこで活躍するための必要な能力です。

### 見通し・行動・振り返り(AAR)サイクル

見通し・行動・振り返り(AAR)サイクルは学習者が継続的に自らの思考を改善し、集団のウェル

ビーイングに向かって意図的に、また責任を持って行動するための反復的な学習プロセスです ([concept note on the Anticipation-Action-Reflection cycle](#) を参照)。計画を立てること、経験、そして振り返りを繰り返すことで学習者は理解を深め、視野を広げます。AAR サイクルはより良い未来の創造に向けた変革を起こすコンピテンシーを育成する触媒です：より良い未来の創造に向けた変革を起こすコンピテンシーは、学習者が状況に適応し、振り返り、必要な行動を起こし、継続して自分の考えを改善していく力に依拠しています。

生徒はウェルビーイングへの道筋を見いだすためにラーニング・コンパスを用いることができる

世界を形作っていく色々な潮流を理解することは、私たちが未来に備えられるようにし、また生徒が今後活躍するために必要なコンピテンシーを特定できるようにもします ([OECD Future of Education and Skills 2030 project background](#); (OECD, 2019<sup>[1]</sup>) を参照)。例えば、人工知能やビッグデータなどの先端技術は人々の働き方、生き方、学び方、そして交流の仕方を変えました。

社会によるウェルビーイングの定義も変わりました。OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトでは「ウェルビーイング」をどのように捉えているのでしょうか？経済的な豊かさは個人または社会のウェルビーイングの一部でしかないことが広く認識されるようになりました (European Commission, 2019<sup>[2]</sup>; Gurria, 2015<sup>[3]</sup>)。OECD のより良い暮らし指標 (Better Life Index) は個人のウェルビーイングに 11 の要因が関与していることを指摘しています。これには仕事、収入、住宅のような経済的要因に加え、ワーク・ライフ・バランスや教育、安全、生活の満足度、健康、市民活動、環境やコミュニティのような生活の質 (Quality of life) に影響を与える要因が含まれます (OECD Better Life Index, 2018<sup>[4]</sup>) (図 2)。

図 2. ウェルビーイングと発展を評価する OECD の枠組み<sup>4</sup>



引用元：Asmussen, K. (2017<sup>[5]</sup>), *Language, wellbeing and social mobility*, [www.eif.org.uk/blog/language-wellbeing-and-social-mobility](http://www.eif.org.uk/blog/language-wellbeing-and-social-mobility).

<sup>4</sup> 日本語訳の出典：「OECD 幸福度白書 3—より良い暮らし指標:生活向上と社会進歩の国際比較—」(OECD 編著, 西村美由起 訳, 2016 年)

個人のウェルビーイングは経済的資本、人的資本、社会的資本、および自然資本を築くことに貢献し、またこれらの資源も長期的に見て個人のウェルビーイングを豊かにしてくれます。

例えば、OECD Future of Education and Skills 2030 は、人間が自然の複雑なエコシステムの一部であることを認識しています (Kolert, 2014<sup>[6]</sup>)。そのため、学習の枠組みには個人のウェルビーイングに影響を与える「環境の質」がその要因として含まれています。生徒は自分個人のウェルビーイングを求めるだけでなく、その仲間、家族、コミュニティ、それから地球のウェルビーイングにも配慮するように学ぶことが期待されるのです。(ウェルビーイングの各指標が実生活においてどのように解釈されているのかを示すために、OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトではウェルビーイング各分野において、生徒がどのような未来を創りたいと思っているのかそのビジョンを語ってもらいました。生徒たちのビジョンは、「[Future We Want](#)」[ビデオ](#)で閲覧が可能です。)

生徒はみな、自分自身のラーニング・コンパスを「持つ」ことが望ましいと言えます。生徒個人々の立ち位置はそれぞれの既有知識、学びの経験と学びに向かう傾向、家庭背景によって異なります。そのため、仲間内であっても生徒それぞれでウェルビーイングへと向かう学びの道筋やスピードが異なるのです。私たちが望む未来には数多くのビジョンが存在するかもしれませんが、社会のウェルビーイングは共通の「目的地」です。

### 国連の持続可能な開発目標

2015年に、国際連合(UN)は2030年に向けた17の持続可能な開発目標を定義しました。それらは様々な領域を網羅しており、貧困と飢餓の根絶、健康の確保、ウェルビーイング、質の高い教育、ジェンダーの平等、気候変動に対する取組みなどを含んでいます (United Nations, 2015<sup>[7]</sup>) (図3)。

図3. 国連の持続可能な開発目標<sup>5</sup>



引用元: [www.un.org/sustainabledevelopment/sustainable-development-goals/](http://www.un.org/sustainabledevelopment/sustainable-development-goals/)

<sup>5</sup> SDGs ポスター (17 のアイコン 日本語版) の出典: 国際連合広報センター [www.unic.or.jp/activities/economic\\_social\\_development/sustainable\\_development/2030agenda/sdgs\\_logo/](http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/sdgs_logo/)

ラーニング・コンパスは生徒が個人のウェルビーイングを獲得し、またグローバルなレベルを含む集団のウェルビーイングを獲得できるように開発されました。OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトはこの目標のもと、国連のパートナー、特に UNESCO と綿密に連携を図っています。下の表は、OECD によって定義されたウェルビーイングの諸側面と国連の持続可能な開発目標の関係性を示したものです。

表 1. OECD のウェルビーイング項目と国連の持続可能な開発目標の関連性

目的地: OECD ウェルビーイング <sup>6</sup>	国連の持続可能な開発目標 <sup>7</sup>
1. 仕事	8. 働きがいも経済成長も 9. 産業と技術革新の基盤を作ろう
2. 所得	1. 貧困をなくそう 2. 飢餓をゼロに 10. 人や国の不平等をなくそう
3. 住居	1. 貧困をなくそう 3. すべての人に健康と福祉を
4. ワーク・ライフ・バランス	3. すべての人に健康と福祉を 5. ジェンダー平等を実現しよう 8. 働きがいも経済成長も
5. 生活の安全	16. 平和と公正をすべての人に
6. 主観的幸福	すべての目標に関連している
7. 健康状態	3. すべての人に健康と福祉を
8. 市民参加	5. ジェンダー平等を実現しよう
9. 環境の質	6. 安全な水とトイレを世界中に 7. エネルギーをみんなに そしてクリーンに 12. つくる責任 使う責任 13. 気候変動に具体的な対策を 14. 海の豊かさを守ろう 15. 陸の豊かさも守ろう
10. 教育	3. すべての人に健康と福祉を 4. 質の高い教育をみんなに 5. ジェンダー平等を実現しよう
11. コミュニティ	11. 住み続けられるまちづくりを 17. パートナーシップで目標を達成しよう

<sup>6</sup> 「OECD 幸福度白書 4—より良い暮らし指標:生活向上と社会進歩の国際比較—」(OECD 編著, 西村美由起 訳、2019 年)を参考に翻訳した。OECD 幸福度白書 4 の原著である “How's Life? 2020: Measuring Well-being” (OECD 編著) とは 11 個の文言が異なる箇所があるが、可能な限り OECD 幸福度白書 4 の訳を尊重し翻訳した。

<sup>7</sup> 日本語訳の出典: 「持続可能な開発目標 カラーホイールを含む SDGs ロゴと 17 のアイコンの使用ガイドライン」 [www.unic.or.jp/files/SDG\\_Guidelines\\_AUG\\_2019\\_Final\\_ja.pdf](http://www.unic.or.jp/files/SDG_Guidelines_AUG_2019_Final_ja.pdf)

## 参考文献

- Asmussen, K. (2017), *Language, wellbeing and social mobility*, [5]  
<https://www.eif.org.uk/blog/language-wellbeing-and-social-mobility>.
- European Commission (2019), *New Narrative for Europe*, [2]  
<https://ec.europa.eu/culture/policy/new-narrative>.
- Gurria, A. (2015), *21 for 21 A Proposal for Consolidation and Further Transformation of the OECD*, <https://www.oecd.org/about/secretary-general/21-for-21-A-Proposal-for-Consolidation-and-Further-Transformation-of-the-OECD.pdf> (accessed on September 2018). [3]
- Kolert, E. (2014), *The Sixth Extinction: An Unnatural History*, Bloomsbury. [6]
- OECD (2019), *Trends Shaping Education*, OECD Publishing, [1]  
[https://doi.org/10.1787/trends\\_edu-2019-en](https://doi.org/10.1787/trends_edu-2019-en).
- OECD Better Life Index (2018), *OECD Better life Index*. [4]
- United Nations (2015), *Sustainable Development Goals*, [7]  
<http://www.un.org/sustainabledevelopment/sustainable-development-goals/>.

## 備考

<sup>1</sup> OECD Future of Education and Skills 2030 のステークホルダーには次の国や地域が参加しています: Argentina, Australia, Belgium, Brazil, Canada (the provinces of British Columbia, Ontario, Quebec and Saskatchewan), Chile, China (People's Republic of), Costa Rica, the Czech Republic, Denmark, Estonia, France, Finland, Germany, Greece, Hong Kong (China), Hungary, Iceland, India, Indonesia, Ireland, Israel, Italy, Japan, Kazakhstan, Korea, Latvia, Lebanon, Lithuania, Luxembourg, Malaysia, Mexico, Netherlands, New Zealand, Norway, Poland, Portugal, Romania, Russia, Saudi Arabia, Singapore, Slovenia, South Africa, Sweden, Switzerland, Turkey, United Arab Emirates, United Kingdom (England, Northern Ireland, Scotland and Wales), United States and Viet Nam. OECD Future of Education and Skills 2030 のステークホルダーには次の国際機関も参加しています: Council of Europe, European Union, UNESCO, and UNESCO IBE.

## 付記

1. 本資料は、Education2030 事業が作成した”**OECD Future of Education and Skills 2030 Conceptual learning framework Concept note: OECD Learning Compass 2030**”(OECD, 2019)を仮訳したものです。

OECD (2019) [www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD\\_Learning\\_Compass\\_2030\\_concept\\_note.pdf](http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_Learning_Compass_2030_concept_note.pdf)  
(2019年6月取得)

2. 仮訳の際、用語をポジション・ペーパー(OECD, 2018)に可能な限り、合わせています。

OECD (2018) [www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper\\_Japanese.pdf](http://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf)  
(2019年6月取得)

例.

- \* Student Agency : 生徒エージェンシー (中等教育資料:「生徒のエージェンシー」)
- \* Learner Agency : 学習者エージェンシー
- \* Co-Agency : 共同エージェンシー
- \* anticipation, action, reflection : 見通し、行動、振り返り
- \* Stakeholder : ステークホルダー
- \* Eco-system : エコシステム
- \* Creating new value : 新たな価値を創造する力
- \* Taking responsibility : 責任ある行動をとる力
- \* Competency : コンピテンシー
- \* Peer : 仲間
- \* Parents : 保護者
- \* community : コミュニティ
- \* School managers : 学校管理職
- \* What knowledge, skills, attitudes and values will today's students need to thrive in and shape their world? : 現代の生徒が成長して、世界を切り拓いていくためには、どのような知識やスキル、態度及び価値が必要か。
- \* How can instructional systems develop these knowledge, skills, attitudes and values effectively? : 学校や授業の仕組みが、これらの知識や、スキル、態度及び価値を効果的に育成していくことができるようにするためには、どのようにしたらよいか。

3. ポジション・ペーパー(OECD, 2018)の仮訳と異なる訳にしたものは以下です。

OECD (2018) [www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper\\_Japanese.pdf](http://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf)  
(2019年6月取得)

例.

- \* OECD Learning Compass 2030 : OECD ラーニング・コンパス (学びの羅針盤) 2030 (2回目以降は「ラーニング・コンパス」と表記)
- \* social and emotional skills : 社会情動的スキル
- \* literacy : 読み書き能力
- \* numeracy : ニューメラシー (数学活用能力・数学的リテラシー)
- \* Reconciling tensions and dilemmas : 対立やジレンマに対処する力

＊Transformative Competencies：より良い未来の創造に向けた変革を起こすコンピテンシー

＊Data literacy：データ・リテラシー（データ活用・解析能力）

＊Digital Literacy：デジタル・リテラシー（デジタル機器・機能活用能力）

#### 4. 仮訳での検討事項

##### ・Co-Agency

ポジション・ペーパーと同じ「共同エージェンシー」という言葉を使うか、「仲間、教師、保護者、コミュニティと協働して構築していく」という面に焦点を当て、「協働エージェンシー」という言葉に変えるか、議論がありました。エージェンシー関連の研究の進展に伴い、協働的な側面の重要性が高まってきたため、「協働」という訳語に変更することも考えられました。しかし、今回は、ポジション・ペーパーの訳からの継続性・一貫性を保つとともに、アンドレアス・シュライヒャーOECD教育・スキル局長の著書「ワールドクラス」の日本語版訳語（「共同エージェンシー」）とも揃え、読み手の混乱を避けることを優先し、「共同エージェンシー」と訳しました。

##### ・AAR Cycle の Reflection

ポジション・ペーパーと同じ「振り返り」という言葉を使うか、学問的に先行研究の蓄積が多い「省察」という言葉に変えるか、議論がありました。省察という言葉、概念が独自の意味を持っているため、AAR Cycle がその意味に含まれるのか慎重な立場を取り、今回は「振り返り」のままとしました。具体的には、「省察」、「省察的实践」のような概念を土台にしていると Education 2030 プロジェクトが明示していないと思われるため、既存の概念との訳の段階での結びつけは避けました。

##### ・OECD Learning Compass 2030

Learning Compass については、ポジション・ペーパーと同じ「学びの羅針盤」という言葉を使うか、児童生徒・教職員を含め、一般に理解しやすい「ラーニング・コンパス」という言葉に変えるか議論がありました。ポジション・ペーパーとの一貫性を保ち読み手の混乱を避けること、また Learning Compass の性質上、一般に広く理解されやすいことが非常に重要と考えられることの2点を重視し、今回は「OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」とカタカナと漢字を組み合わせたとしました。また、2回目以降の表記では短縮した「ラーニング・コンパス」としました。

##### ・Reconciling tensions and dilemmas

ポジション・ペーパーと同じく「対立やジレンマを克服する力」や、他の候補として「対立やジレンマに折り合いをつける力」が挙がりました。しかし、前者は「対立」という個人の外の世界の言葉と「克服」という個人内の言葉とが重なることで少しいメージしづらくなってしまふこと、後者は「折り合い」という言葉がやや受動的かつあきらめのようなニュアンスも含んでしまうというコメントを現場から得たことから、今回新たに「対立やジレンマに対処する力」としました。

##### ・Core Foundations

「主要基礎能力」という訳も検討されましたが、基礎、能力、という用語が適切なのかという問題定義があり、コンセプトノートの定義から Core foundations は prerequisites for further learning であるという記載を考慮し、学びのための基盤・土台という概念のほう

がよりふさわしいと議論され、また Core を強調した方がよいという意見から、最終的に「学びの中核的な基盤」としました。

- **Community**

「地域社会」という訳も検討されましたが、地理的なものを超えたつながりも想定し、本文書ではポジション・ペーパーに倣いコミュニティと訳しています。

- **Student Agency**

ポジション・ペーパーに合わせて「生徒エージェンシー」と訳していますが、対象は中等教育の生徒に限らず、小学校の児童、場合によっては幼稚園・保育園の幼児、また高等教育、生涯教育などすべての学習者を対象として解釈しています。